

ある雑誌の巻頭コラムに、86歳の現役プレーヤーが次のように紹介されていた。

11歳で野球を始める。高校、大学を経て、理科の教師として中学、高校と勤務する傍ら、県軟式野球選手権大会に選手兼監督で出場し、優勝。36歳からはソフトボールをプレー。さらに、中学校の校長を退職後に本格的に始めたソフトテニスでは、全日本シニア選手権大会にて、優勝2回、準優勝2回を経験している。また、2014年の第21回アジアシニア選手権大会では、男子団体優勝、男子個人75歳以上の部で準優勝を果たしている。現在は、週3回、シニアの仲間たちと練習に励み、生涯スポーツライフを謳歌している。

こんな方が、いらっしゃるとは、多少驚かされた。私もソフトテニスをやっているのだから、退職後に始めて全日本シニア選手権大会で優勝するというのは、並大抵のことではない。社会人になってから始めて県レベルの大会で優勝するようになった方は知っていた。60歳で退職後に始めて日本一になるとは、すごい。

この方は、生涯楽しめるスポーツとしてソフトテニスに出会う。それまでは遠く眺めていただけだったが、長くプレーできるシケガも少ないのではと、定年を機にソフトテニス一本へと進んだ。

自分がやってきたソフトテニスを生涯スポーツという視点から見たことがなかった。そういえば、テニスコートに行くと、いつも和気あいあいとプレーするシニアの団体があった。70代、80代の方々が男女関係なく、楽しそうにプレーしている姿を何気なく見ていた。長男と長女が小学生の頃は、何度か練習や試合の相手をしていただいたこともあった。生き生きとしている姿は、まぶしいくらいだった。

震災があった2011年は、長男が中学1年生、長女が小学3年生だった。息子は部活動で、娘はジュニアクラブで、それぞれソフトテニスをやっていた。福島市内のテニスコートが使えなくなり、練習場所がなくなった。県内はもとより山形県、宮城県のテニスコートを調べ尽くした。

その結果、落ち着いた先が猪苗代町と米沢市のテニスコートだった。週末になると、家族4人で出かけた。家人は、素人プレーヤーである。二人の子どもと一緒に家人も練習に参加し、腕を上げていった。コーチは私である。猪苗代町のコートの管理人さんとは、すっかり顔なじみとなった。

練習が一段落すると、4人でダブルスの試合というのが、お決まりのパターンである。ペアは息子と家人、娘と私である。結果は、娘と私のペアが勝つ、これもお決まりだった。震災直後という苦しい状況の中での、ほんの束の間の楽しい時間だった。

自分の中では、ソフトテニスは終わりと思っていた。だが、待てよ。たまにテニスコートに行き、家人とソフトテニスに親しむこともわるくない。今までは、楽しくもあり、苦しくもあったソフトテニスだが、生涯を通して楽しむスポーツとして改めて見てみると、また違った魅力があるように思えてくる。86歳の現役プレーヤーに、その秘訣を聞いてみると、とにかく「楽しむ」とのことだった。